



800年前の悲しい実験

「先生、伊勢に行ってきたよ。」

「先生、この前歯が抜けたよ。」

「先生、昨日焼肉食べたよよ。」

月曜日の朝は、たいていこのような形でたくさんのニュースが知らされます。

わずか2日間しか会っていないにもかかわらず、その間には多くの「知らせたいこと」が生まれているのでしょうか。

他にも、髪を切ってきた子がいれば、新しいジャンパーを着ている子がいて、ちょっと見渡すだけで、色んな変化が目飛び込んできます。

以前も書いたことがあるかもしれませんが、子どもにとって周りの大人からそそがれる眼差し、つまり「注目」は何よりのご褒美です。

物よりも活動よりも、大人から「見てもらっている」という感覚こそが、子どもたちの生きる意欲になることが、最近科学的な見地からも明らかになってきています。

今から約800年前。

神聖ローマ帝国の皇帝に、フリードリヒ2世という人物がいました。

学問の中でも、取り分け「人間がどのように成長していくか」について興味を持っていた皇帝は、ある実験を行うことにしました。

現在ではとても考えられない、悲しく恐ろしい実験です。

彼は「言葉を教わらないで育った子どもが、どんな言葉を話すのか」という疑問を持ちました。

6ヶ国語を話すことができたフリードリヒ2世は、人間は生まれたときから自分の言葉をもっていると思っていました。

それはきっとヘブライ語に違いないと期待していたのです。

フリードリヒ2世はこの実験のため、部下に50人もの赤ちゃんを集めさせ、部屋に隔離させました。

そこで下記のような条件で実験を行ったそうです。

- 赤ちゃんの目を見ない
- 赤ちゃんに笑いかけない
- 赤ちゃんに語りかけない
- 赤ちゃんとふれあいを一切しない
- しっかりとミルクを与える
- お風呂にはきちんと入れる
- 赤ちゃんの排せつの処理をする

つまり、赤ちゃんが生きるのに必要なことはすべて与えた一方で、スキンシップや愛情を与える機会を与えなかったのです。

実験の結果はおそろしいものでした。

言葉を覚えられなかった。

表情が乏しくなった。

そんな程度の結果ではありません。

愛情を示してもらえず、言葉もかけてもらえなかった赤ちゃんたちは、誰ひとりとして育つことができませんでした。

全員が、1歳の誕生日を迎えることなく亡くなったのです。

とても悲しい実験でしたが、ここから一つのことを明らかになりました。

それは、

「赤ちゃんはスキンシップなしでは生きていくことができない」

ということです。

発育に影響がある、なんていう程度ではありません。

生きていくことができないのです。

抱っこをしてもらうこと。

あやしてもらうこと。

語り掛けてもらうこと。

微笑みかけてもらうこと。

こうしたことを何度も繰り返し、肌と肌を触れ合いながら愛情をかけても

らうことこそが、赤ちゃんの小さな小さな命を守り、育てているのです。
だから、次のことも理解できるはずですよ。

今、自分の命があるということは、赤ちゃんの頃からたくさんのスキンシップや愛情をかけて育ててもらった何よりの証である

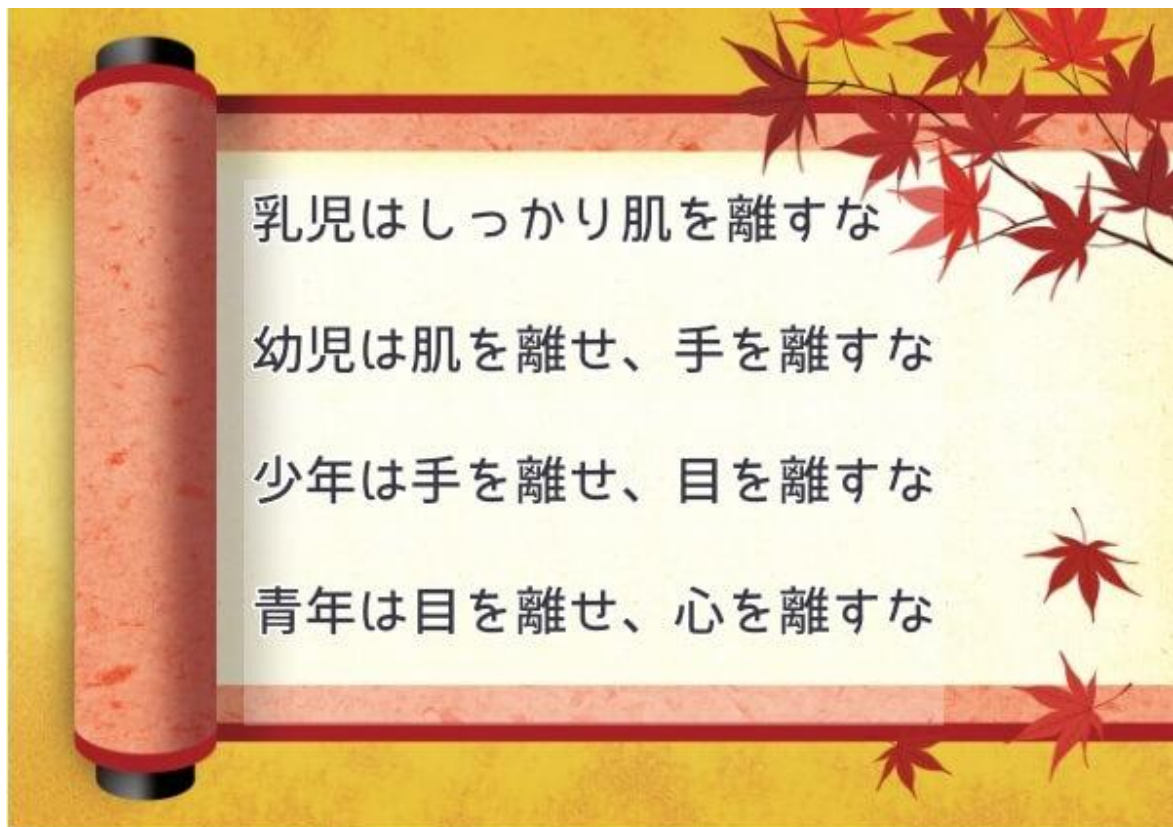
ということです。

生まれたばかりの頃。

まだ物も見えず、話もできないその頃から、無数の愛情をかけてもらって、そのおかげで今の私たちの命があります。

そして、その愛情ある関わりは、幼児期だけでなく、学齢期にもとても大切なものなのです。

有名な「子育て四訓」を紹介します。



ここでいう「少年」が、まさに学齢期の子どもたちを指します。

出来ることが増えるからこそ、手を離して色々とチャレンジさせてあげることが大切な一方で、「あなたのことをちゃんと見ているよ」というメッセージは絶えず伝え続ける必要があるということです。

そして、注目は目線だけでなくいろんな方法で与えることが可能です。

4-1で取り入れているキャプテン制度がそうです。

教室に張り出している自作の新聞もそうです。

先日始めた会社活動もそうです。

授業中の目線もそうです。

その度に子どもたちは「見てもらえた」「応援して貰えた」という暖かなまなざしを感じて、次なるチャレンジへと進んでいきます。

つまり「目をかける」にも色々な方法があるということです。

目線であったり、表情であったり、言葉であったり、任命証であったり、いろいろな方法で、「注目」という名の愛を注いでいければと思います。

☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

